イメージ心理学研究　2020, 18, 31－38
〔シンポジウム〕


# 宮沢賢治のイメージ特性の理解に向けて
## ― イメージ個人差の観点から ―

畠　山　孝　男

（山形大学[1]）

### 1. はじめに

宮沢賢治がとてつもない，あるいは希有なイメージ能力を持っていたことは，確かであろう。本シンポジウムの3人の演者の発表も（浜垣，2019；栗原，2019；大島，2019），筆者がイメージへの心理学的研究の関心からたまたま手にした賢治に関する数冊の書籍も（池上，1992；板谷，1990, 1992；栗谷川，2014；山下，2017），そのことを示している。本稿では賢治の持つイメージ特性の理解に向けて，イメージ個人差の観点から手がかりとなる知見を提供することとしたい。

### 2. イメージ能力の4つの次元

イメージ能力を鮮明性，統御性，常用性（表象型），没入性の4つの次元で考えることによって，イメージ個人差の全体を見通すことができる。ここでは最初に，筆者がこれまで用いることの多かったイメージテストを中心に，それが測ろうとしているものを通して各次元の意味するところを押さえておきたい。

イメージ鮮明性の測定には，7感覚モダリティのイメージ質問紙 QMI（Richardson, 1969　鬼沢・滝浦訳 1973; Sheehan, 1967）や，視覚イメージ鮮明性質問紙 VVIQ（Marks, 1973）が用いられることが多い。フレーズを呈示して，それを元に喚起されるイメージがどの程度実際の知覚に似ているかについて，QMI は7つの，VVIQ は5つの段階づけされた記述文から選ばせる。イメージの鮮明度が実際の知覚との近似の程度として想定されていることがわかる。

統御性テストは，視覚イメージ統御性テスト TVIC（Gordon, 1949; Richardson, 1969）で測定される。このテストでは1台の自動車に関するイメージを，記述に合わせて次々に変化させることができるかどうかを調べる質問紙で，「はい」「いいえ」「確かでない」の3件法で回答が求められる。イメージ統御性が，要求に合わせた柔軟なイメージの作り替えを含意していることが知られる。

また昔から，想起や思考，想像において，優勢に働くイメージの感覚領域に個人差があることが知られており，表象型と呼ばれてきた。個人差質問紙 IDQ（Paivio, 1971; Paivio & Harshman, 1983）や，それから項目を抽出した言語型－視覚型質問紙 VVQ（Richardson, 1977）が比較的多く用いられている。両テストは言語尺度とイメージ尺度から成り，記述が自分に当てはまるかどうかを「はい」「いいえ」の2件法で答える形式である。ここで測られる常用性は，好んで用いる言語とイメージの表象傾向の多さを意味していることがわかる。

没入性は知覚刺激や場面，空想・想像への没入の程度を表す次元である。テストとして没入性尺度 AS（Tellegen & Atkinson, 1974），想像活動への関与尺度 III（Davis, Dawson, & Seay, 1978；笠井・井上，1993）がよく用いられる（AS の日本語版は認められていない）。没入性の中に空想傾向が含まれるが，それを中心的に調べる尺度に創造的体験質問紙 CEQ（Merckelbach, Horselenberg, & Muris, 2001；岡田・松岡・轟，2004）がある。

### 3. 次元間の関係

イメージ能力の4つの次元間の関係は，畠山（2018a）の大学生を対象にした QMI，VVIQ，TVIC，VVQ，III の相関分析の結果で見ると，次の通りである[2]。鮮明性テスト同士の QMI（7モダリティ）と VVIQ（視覚）の相関は $r$ = .56 と高く，鮮明性はモダリティ横断的であることがわかる。鮮明性と統御性の間には低い相関が見られる（QMI-TVIC $r$ = −.30; VVIQ-TVIC $r$ = −.31）。VVQ の視覚尺度（VVQ-Visual）による視覚化傾向と，鮮明性，統御性との相関はごく小さい（VVQ-Visual-QMI $r$ = −.13; VVQ-Visual-VVIQ $r$ = −.21; VVQ-Visual-TVIC $r$ = .15）。鮮明性と没入性の間には低い相関が見られる（QMI-III $r$ = −.28）。こうした結果から，鮮明性と統御性，鮮明性と没入性の間には，小さいながら関連があるものの，各次元は相対的に独立していることが知られる。一口にイメージ能

[1] 名誉教授
[2] 鮮明性テスト QMI，VVIQ は，低い値の方が鮮明度が高い評定値を採用しているため，他の次元のテストとのいわゆるポジティブな関係の相関係数は負の値になる。

力と言うことはできないのである。

### 4. イメージテストの得点分布

イメージテストの得点の分布から，イメージ個人差の様相を見てみよう。畠山（2019）は児童（小学4–6年生）と大学生のQMI，TVIC，VVQ，IIIの得点の分布について検討している。その概要は次の通りである。なお児童には，趣意を損なわない範囲で元のテストに修正を加えた児童版が用いられている。児童版ではQMIとIIIの7段階尺度が5段階に，TVICの3件法が2件法に変更されている。

QMIは児童，大学生とも肯定側（鮮明性が高い）に偏った分布を示し，児童では中間値までの間に（低い値の方が鮮明）93.5%，大学生では96.6%が含まれる。児童では高いレベルの鮮明度を示す者が大学生より多いという特徴がある。大学生の分布は正規性を示す。

VVIQは児童，大学生ともそれぞれQMIと同様の分布を示す。肯定的に反応する傾向は児童，大学生に共通で，中間値までの間に（低い値の方が鮮明）児童90.4%，大学生79.3%が含まれる。児童では高いレベルの鮮明度を示す者が大学生より多いのもQMIと同様である。大学生は正規分布に近い分布を示す。

TVICの分布も，児童，大学生とも肯定側（統御性が高い）に偏っていて，児童は12点満点中7点以上が84.7%，大学生は24点満点中13点以上が84.8%である。児童では満点が大学生より多いが，その点を除けば，それぞれ7点以上，13点以上の分布は非常に緩やかな山型を示す。

VVQに関しては，言語尺度への否定的反応を視覚得点に加える採点法の得点の分布は，児童，大学生とも正規分布に近い。言語尺度の得点分布は，両群とも緩い山型を示す。視覚尺度の得点分布は，両群とも視覚化傾向が大きい方に偏った分布を見せ，児童は8点満点中5点以上が77.2%，大学生は71.8%である。

IIIは，児童，大学生とも正規分布を示すが，児童は中間値以上に72.6%が含まれていて，肯定側（没入性が高い）に大きく偏っているのに対して，大学生は中間値以上が36.7%で，低い方向に分布がシフトしている。児童の没入性の高さは発達的な特徴だと言うことができる。児童も大学生も共に分布の幅は大きいが，全体的に児童は大人に比べて没入性がはるかに高いのである。

### 5. 得点分布から示唆されること

イメージテストの得点分布から言えることは二つある。一つはイメージ生成・使用の普遍性である。児童において鮮明性テストで高いレベルの鮮明度を示す者，及び統御性テストで満点の者が大学生より多い点を除いて，各イメージテストとも児童の分布と大学生の分布は，非常に似ていることが知られる。そして鮮明性と統御性の評定が肯定側に大きく偏った分布を見せることについては，Kihlstrom, Glisky, Peterson, Harvey, & Rose（1991）がQMI，VVIQ，TVICに関して大学生のデータで示した結果と同様である。加えてVVQの視覚尺度への反応も同様なので，イメージ生成やその使用傾向に関しては，肯定的方向への偏りが普遍的だと言ってよく，Richardson（1994）の言う「人間が広く持つ」（species-wide）特性（p.60）であることを示していると言える。

さらに，児童において没入性テストが高い側に偏った分布を示すという知見は，注目すべきである。児童は押し並べて知覚刺激や場面，空想・想像への没入の程度が高いのである。こうした発達的傾向も，イメージの生成・使用の普遍性を示しているものと理解される。外的世界，内的世界への没入が児童をして「遊ぶ人」であるとともに「学ぶ人」にしていることは，十分考えられるところである。

歴史学者Harari（2011　柴田訳　2016）は，人類に7万年前から3万年前にかけて，「虚構を信じる力」という新しい思考と意思疎通の方法が登場する認知革命が起こったと述べている。チンパンジー研究者の松沢（2011）は，チンパンジーとヒトを違えているのは「想像するちから」であるとしている。共にイメージ生成・使用の普遍性の主張と軌を一にした指摘と言えるだろう。

もう一つ得点の分布から言えることは，イメージ個人差の普遍性である。どの次元でも分布に大きな幅がある事実は，イメージを生成し活用する能力に個人差があることを示し，人間のバリエーションの一つにイメージがあることを示している。そしてまた，児童の段階から大きな個人差があることは，イメージ能力に生得性が関与する可能性を示唆する。イメージ，イメージ個人差，個人差の発達と起源の探究は，人間の根源に関わるテーマだと言うことができる。

### 6. 鮮明性のプラス面とマイナス面

賢治のイメージは大変な鮮明さを持っていたと考えられるので，鮮明性の持つ認知的効果について見ておきたい。畠山（2018b）はイメージテストが認知的課題や事態をどのように予測するかについて，広範な研究の展望を行っている。その中から鮮明性テストの予測力についてごく大まかに概括すると，鮮明性は神経心理学的基盤を持つ特性で，生理的反応の制御に関係する。知覚刺激の入力に優れ，イメージ生成が速く，知覚との機能的等価性を示し，イメージの中に豊富な情報を保有する。困難度・複雑度の高い材料の学習や

偶発学習事態での学習に効果を持つ。児童期に体験した事柄の想起頻度が多い。創造性との関係，自尊感情の維持，ボディー・イメージの歪みの少なさ，聴覚イメージ鮮明性と歌唱の正確さとの関係といったプラスの側面が見られる。

その一方，鮮明性は嫌悪の報告数との関連，反事実思考のしやすさ，流産のような出来事での悲哀の大きさ，嗅覚イメージ鮮明性と肥満との関係といったマイナス面の効果が報告されている。顔の再認実験や，見慣れた事物や有名人の顔の想起課題で，想起は正確ではないが確信度が高いという知見もある。また鮮明なイメージが統御できないことによる認知面・適応面での不利が予想される。鮮明性と統御性を組み合わせた研究は非常に少ないが，鉄棒の心的訓練の効果が高鮮明 - 低統御群で最も低いという報告がある（Richardson, 1969; Start & Richardson, 1964）。

## 7. 没入性の機序

賢治が極度の空想傾向を持つ人物であったことは誰しも認めるところであろう。本シンポジウムでも浜垣（2019）は，「心象スケッチ」という実践行為が現実と空想の境界を攪乱し，賢治の生来の空想傾向を促進することになったのではないかと考えている。大島（2019）は，異世界が現実世界のすぐそばにあるという賢治の世界観に空想傾向の影響を考え，それがエピソードや作品に現れている例を種々示している。空想傾向は没入性の一部だと考えられるので，まず没入性の働く仕組み（機序）について押さえておくことにしたい。

没入性の機序の一つは，想像活動への関与の強さである。以下のような知見がそれを示している。

畠山・川俣（2005），畠山（2006b）は日常生活の中で自然に働く想像反応傾向と没入性テスト III との関係について，小学校高学年児童，中学生，高校生，大学生を対象に調査を行った。想像反応として，怖い想像への接近傾向，怖い想像への回避傾向，占い・まじないへの接近傾向，不思議体験，生き返り信念が取り上げられた。その結果，どの年齢段階でも没入性の高群が低群より反応傾向が高かった。没入性は児童から大人まで想像反応傾向の大きさを予測することが知られる。

また畠山（2005，2006a）は超常信念と没入性との関係について，想像反応傾向の調査と同対象で調査を行った。超常信念として，占い系 4 項目（おまじない，手相，血液型性格判断，占い），疑似科学系 2 項目（超能力, UFO），旧来宗教系 3 項目（神社などのお守り，神仏の存在，たたり），第 2 と第 3 グループの中間に位置する第 4 グループ 3 項目（前世の存在，霊，死後の世界）の計 12 項目を提示して，信じているものの選択を求めた。その結果，選択項目数は没入性高群が低群より多く，超常信念のどの項目，信念系でも高群が低群より選択率が高かった。没入性は児童から大人まで超常信念の保持を予測することが知られる。

その他，小山内・岡田（2011）は物語理解に伴う主観的体験（物語体験）の中核は物語の世界への没入だとしている。Belicki（1992）は悪夢の頻度や苦痛に没入性が関係すること，岡田（2004，2006），van de Ven & Merckelbach（2003）は幻聴・空耳に鮮明性と没入性が関係することを報告している。

没入性のもう一つの機序は弛緩状態の惹起である。畠山（2009，2011）は指尖皮膚温の制御と没入性との関係を調べた。温暖イメージ課題，寒冷イメージ課題，数唱課題で指尖皮膚温の変化を測定した結果，III 得点が高い群は課題にかかわらず皮膚温を上昇させること，特に初期皮膚温の低い群でそれが顕著であることが示された。没入性が解離性体験や催眠感受性と関連があることと相まって（笠井・井上，1993），没入性高群が弛緩状態を惹起しやすい特性を持つことが示唆される。

## 8. 空想傾向

次に空想傾向の基本的特徴を押さえておきたい。イメージ研究において空想傾向が注目されるようになったのは，Wilson & Barber（1983）が催眠研究の中で空想傾向の高い一群の人たちを発見し，空想傾向人格（fantasy-prone personality）と呼んだのを契機にしている。時間の多くを空想に使い，空想したことを十全に体験し，広範で深い空想への没入を基本的特質とする少数の人たちで，幻覚する能力，際だった催眠感受性，体験の鮮明な記憶，超常体験との親和性といった特徴を有するとされる。Wilson & Barber（1983）は，空想傾向人格の出現率は 4％程度ではないかと推測している。

空想傾向と超常体験，偽記憶，統合失調傾向などとの関係がしばしば言及されている（例えばMerckelbach et al., 2001）。超常現象は Wilson & Barber（1983）も挙げている特徴である。偽記憶は，空想傾向者においては，現実と空想が混同されて実際に体験したように追想されることで生ずると考えられる。また松岡（2010）は，空想傾向のポジティブ機能に着目して研究の展望を行っている。空想傾向の強さには病理性をもたらすネガティブな働きと生産的で創造的な体験をもたらすポジティブな働きの両面があり，空想傾向が情緒の安定（神経症傾向の低さ），イメージ活動の意図的制御，ポジティブ感情の増幅を媒介要因としてウェルビーイングに関係するというモデルを提示して

いる。

**9. 没入性，空想傾向，解離の関係。**

柴山（2007）は賢治の体験世界について解離，特に意識変容の観点から考察を展開している。本シンポジウムでも浜垣（2019）は，賢治が生来的に「自我境界の薄い人」であるとして，賢治の様々の解離体験について共感性と催眠感受性の高さに関するエピソードや，作品に描かれた種々の事例を示して，「自我境界の変容」から説明を試みている。それらの事例はまた，空想傾向の現れとみることもできるだろう。空想傾向と解離の関係はどのようであろうか。

没入性との関連が予想される諸特性について特性間の相関の知見を集約してみると，空想傾向は没入性と $r$ = .40–.77 の相関，解離と $r$ = .47–.63 の相関を示す。空想傾向が没入性の中に含まれる特性であることを考えれば，没入性との相関が高いのは当然であるが，解離との相関も高いので，空想傾向の高い人は解離を起こしやすいと言うことができる。没入性は解離と $r$ = .31–.40 の相関，催眠感受性と $r$ = .11–.44 の相関を示し，催眠感受性と解離は $r$ = .15–.39 の相関なので，没入性，解離，催眠感受性の相互の相関はいずれも大きくないことが知られる。しかし田辺・笠井（1993）は，催眠感受性と解離の相関は $r$ = .15 とごく小さかったが，催眠感受性高群は低群・中群より解離性テストの得点が顕著に高いことを報告している。没入性にまつわる諸特性には，全体としては相関が大きくなくても，一つの特性が高い者においては他の特性も高いことが十分考えられる。そうではあるが，全体的な集団で見るとき，空想傾向の高い人は没入性が高く，しかも解離を起こしやすいと言うことができるだろう。

**10. 賢治のイメージ特性**

イメージ能力の4つの次元から賢治のイメージ特性について推測してみると，どうなるだろうか。

鮮明性については，イメージが内的喚起に留まらずに，知覚に超絶的な変容をもたらす体験をしばしば持ったことを踏まえると，賢治のイメージは知覚を変容させるほどの極度の鮮明性を持っていたと言うことができるだろう。そこから賢治においては，第6項で触れた鮮明なイメージのプラス面の効果とマイナス面の効果が非常に大きかったことが予想される。例えば鮮明なイメージは意図的学習・偶発的学習事態での学習に大きく貢献したのではないか。詩や童話の創作，演劇や花壇設計といった創造的活動にも，イメージの効果が遺憾なく発揮されたのは間違いない。自尊感情も維持されたのではないか。事物，人，食べ物，場面などに対しての嫌悪についてはどうだろうか。様々な嫌悪の対象があったかもしれない。また知覚を凌ぐ賢治のイメージの力は，反事実思考の極端な例と言うことができるだろう。賢治においては現実よりも想像の世界の方がはるかに力を持っていたと思われるので，日常生活の中でも実際の出来事に対する代替の想像は非常に大きかったことが推測される。悲哀は非常に大きかったのではないか。体験したことの想起の確信度は高かったと思われる。

統御性についてはどうだろうか。賢治のイメージ体験は意図や意志とは関係なく起こり自律性をもって展開されたようなので，統御はきかなかったのだと理解される。つまり賢治のイメージ統御性は非常に弱かったものと考えられる。そこから，第6項で触れた鮮明なイメージが統御できないことによる認知面・適応面での大きな不利が予想される。ただ賢治においては，栗谷川（2014）の指摘するように，自己の「心象」という特異なイメージ現象を「科学的正確さで点検しようとした」（p.183）ようである。またそうした体験を「素材」として詩や童話の作品にするときは，大島（2019）の指摘するように客観的な「詩人の目」が働いていたであろう。栗原（2019）も賢治は空想と現実との関係をわかった上で表現しているとしている。自己の特異な表象体験を客観視しようとする態度が，不利を軽減したことが考えられるだろう。

常用性については，賢治が極度の空想傾向を有し，しかも多様な共感覚を持っていたのであり（大島，2019；山下，2017），作品の中に様々なイメージ体験を反映していて，文字通り極度のイメージ型であった。そして膨大な作品群の遺産は最高度の言語型でもあったことを示している。表象型は専攻や職業の選択と関係するが（例えば Hiscock, 1978; Kawahara & Matsuoka, 2013），賢治は自身の表象特性を宗教活動や創作活動，教育実践に存分に活かし，農民支援の実践活動にも活かそうとしたものと理解される。

没入性も最高度であったことが推測される。子どもの頃「石コ賢さん」と家族からあだ名されるほど岩石に魅せられ，鉱物採集に熱中したことや，教員時代に川遊びでりんごを何度も水に落としてその美しさに感嘆したといったエピソードなどは，刺激への没入の仕方の特異さを示している。童話創作を猛烈な勢いで始めた頃，文字が一字ごとに紙から跳ね上がって自分にお辞儀をしたと語ったエピソードは，フロー体験の極致であるだろう。レコードをかけて，ありありと知覚される情景を陶酔して語り，時には踊り出す。草原に飛び込んでいって「ホーホーホー」と声を上げて飛び上がり欣喜雀躍する。この種のエピソードには事欠かない。第7項で挙げた没入性の二つの機序の一つ，想像活動への関与の強さが文字通り当てはまると言って

よい。

賢治は催眠感受性が高かったようであるが（浜垣，2019），没入性のもう一つの機序，弛緩状態の惹起しやすさを強度に持っていたと思われる。賢治においては何らかの刺激や場面や感情を契機にしてすぐに変性意識（斎藤稔正，1973）が起こり，しかもしばしば超常的と言えるようなイメージ現象をもたらすことになったのであろう。契機の一つとして大島（2019）は「匂い」を指摘している。またそうした意識の変容が起こる様相は，柴山（2007）や浜垣（2019）が指摘する「解離」と言えるものであっただろう。

空想傾向は没入性の一部だと考えられるが，賢治は Wilson & Barber（1983）の挙げる特徴の全てが当てはまり，極度の空想傾向人格であったと見ることができる。そしてまた，空想傾向と関係があるとされる特徴のうち，超常体験は賢治のイメージ体験の中核であったと言うことができるだろう。偽記憶との関係については，賢治においては体験自体が空想に強く彩られていて，現実と空想の混同が頻繁に起こったのではないかと推測される。その上，記憶の想起は再構成過程であり変容が起こるので（齊藤智，2013），体験の記憶自体も想起に際して変容することが考えられる。そうした二重の意味で，賢治の場合は想起が偽記憶に該当するものが多くなると思われる。賢治が体験をメモ，短歌，「心象スケッチ」の形で記録しようとしたのには，心象スケッチに日付を付したことを含めて，体験と現実との境目の曖昧さが強く意識されて，想起の際に区別ができなくなることへの懸念はなかっただろうか。統合失調傾向との関係についてはどうだろうか。柴山（2007）は，解離の主観的体験は多くの点で統合失調症の初期症状と類似しているとしているので（p.153），賢治においても統合失調傾向と重なる面があるものと思われる。但し，柴山は賢治の統合失調症を連想させるような幻聴などの徴候は，意識変容による解離の現象と考えており，浜垣（2014b）も賢治の幻聴について，統合失調症の特徴とは違い，解離性幻聴の特徴に当てはまるとしている。賢治においては解離を起こしやすい特性の方が本質なのであろう。

前項で没入性，空想傾向，解離，催眠感受性の関係について述べたが，賢治はこれらの特性全てが極度に高かったものと推測される。空想傾向の高い人は没入性が高く，しかも解離を起こしやすいということからすると，賢治のイメージ特性を理解する鍵は空想傾向だと考えることができるだろう。

### 11. 賢治の適応面

賢治の適応面についてウェルビーイングとの関係で考えてみたい。第 8 項で引用した松岡（2010）のモデルは，空想傾向が情緒の安定（神経症傾向の低さ），イメージ活動の意図的制御，ポジティブ感情の増幅を媒介要因としてウェルビーイングに関係するというものである。3 つの要因のうちイメージ活動の制御の要因に着目すると，賢治が心象スケッチとして記録に留めようとしたのは，自分が統御できないイメージ体験であった。それが不可思議で奇怪なものであった場合，適応面で苦悩をもたらしたであろうことは想像に難くない。栗谷川（2014）は，「そうした（心象という）奇怪な経験を持たなければならなかったことの，栄光と，そして苦悩が，賢治という天才の最大のドラマであった」（p.11）とし，そうした視点が従来の賢治論に欠けていたことを指摘している。そして「賢治がほんとうに逃れたかったのは，点竄の術でも，家業からでもなかった。その根底にある，彼自身の奇怪な『心象』からでした。」（p.80）としている。自分のイメージ現象から逃れたかったが，それを生きるしかなかったというのが賢治の実像ではないかと思われる。心象スケッチはその覚悟の結果なのであろう。栗谷川（2014）は，賢治が法華経を読んで自分が異空間を垣間見ていると確信するようになったのが転機だったと考えている（p.26）。賢治の作品に出てくる幻覚や不思議な体験の扱いについては，浜垣（2014a）も，正面から取り上げられることが少なく一種の「黙殺」をされている状況であるとして，議論への期待を述べている。賢治理解のために欠かすことのできない問題のはずである。

前項で没入性との関連で賢治のフロー体験について触れたが，山崎・松岡（2017）は，空想傾向と内的統制感がフロー体験に影響することでウェルビーイングを規定するというモデルを示している。このモデルを元にすると，賢治のウェルビーイングを理解する重要な要因は，内的統制感だと考えられる。賢治が例えば童話創作に没頭しているとき，内的統制感に満たされていたはずである。そこではイメージの生起や変化・展開は必然性を持ち，違和感はなかったであろう。それはまた，レコードを聴いたり，山野の彷徨でイメージ体験をしている多くの場合にも当てはまるだろう。賢治においてイメージは自律性を持っていて統御はできなかったと思われるが，それでも主体的に希求して招来されるイメージは，内的統制感が保たれている程度に応じてウェルビーイングの増進に寄与したのではないかと考えられる。浜垣（2019）は賢治が創作の方法論として心象スケッチを採用したことを指摘しているが，そうであれば内的統制感もそれなりに生まれやすかったであろう。実生活では現実世界と直接関わることになるので，苦労が多かったのではないかと推測される。

## 12.「賢治の学校」

Wilson & Barber（1983）は空想傾向人格の出現率は4%程度ではないかとしているので，賢治に似たイメージ特性を持つ人は，程度は別にして一定数いることに留意したい。公立小学校の教師を30年勤めて退職し，「農民芸術概論綱要」を実践するという意図のもと，「賢治の学校」を創設して教育実践に邁進した鳥山敏子（1941-2013）も，そうした人物の一人であったと思われる。鳥山の著書『賢治の学校』（1996）の中に次のような記述がある。

「（竹内演劇研究所での）ことばのイメージを追いかけるレッスンで，あるとき竹内さんが『谷』といった瞬間，私は際立つ崖っぷちを足を滑らせながら必死になってよじ登っている自分のイメージが湧いてそのイメージを追いかけていったのだが，なかに一人，『谷』という文字だけは出てくるが何もイメージが湧かないという人がいた。私はひどく驚いた。イメージが湧かないからだというものがあるのだなと妙に感心したのである。」（p.37）。「花を見ても，花のひとつひとつのことばが賢治には本当に聞こえていた。私にもその体験があるのでよくわかる。」（pp.63-64）。

その鳥山が公立小学校時代に，授業実践をもとにして執筆した著書の中に『イメージをさぐる』（1985）がある。書名にイメージと銘打たれているので，その中で扱われている授業名を挙げて参考に供したい。朗読の授業「『スイミー』を読む」，身体表現「踊る」の授業「音・イメージ・踊る－シンセサイザーの曲で『スイミー』を踊る－」，朗読の授業「『スーホの白い馬』を読む」，身体表現「なってみる」の授業「カマキリになってみる」，「土になる，地球になる」，「ヒマワリの一生」である。どの授業にも多くのページが割かれていて，そこには教師と子どもたちが，心から実感が得られ納得できる表現をとことん追求する姿が見られる。鳥山は『賢治の学校』の中でも，イメージの授業を大切にしていることを述べている。ことばのイメージ，音楽のイメージ，動きによるイメージ，絵や文章によるイメージなど，「それぞれのからだが意味があってイメージしてくるもの」（p.242）を，絵，ダンス，音楽，物語，詩などに表現していくのだとしている。そうしたイメージの授業は，ある意味，賢治ないしは鳥山のイメージ体験に近似した体験をする方法論とも言えるのかもしれない。『賢治の学校』の帯には，「みんなが賢治にかえる，みんなが賢治になれる。」とうたわれている。

また鳥山は『賢治の学校』で，道徳的によくないとされていることについて，賢治の作品を使って授業を行っていることを紹介している。賢治の童話にはいじめる，嫉妬に狂う，自慢する，きざに振る舞う，殺すなど，心の闇を描いたシーンがたくさん出てくるので，心の中に閉じ込められている，やってはいけないとされているものを解放していくのに非常に有効だと鳥山は述べている（pp.244-246）。きれい事で終わりにしない道徳の授業づくりのヒントになると思われる。

## 13. おわりに

本稿ではイメージ個人差の観点から，賢治のイメージ特性の理解に向けて手がかりとなる知見の提供を試みた。賢治については筆者の知識不足のため，多分に的外れのところがあるかもしれないが，賢治理解になにがしかの貢献ができているのであれば幸いである。稿を閉じるに当たって二つ付け加えておきたい。

一つは国語の教材で賢治が取り上げられる場合についてである。賢治の作品が彼自身のイメージ体験をもとにして創作されていることを考えると，賢治が表現していることが実感に至らない生徒が少なからずいるのではないかと推測される。イメージの生成・利用は普遍的で，ほとんどの生徒がそれなりに想像できるとしても，実感を持つレベルとなると賢治や鳥山のような感覚，心性が必要になるかもしれない。つまり，概念としては理解しても，リアルな質の表象形成となると空想傾向が重要かもしれないのである。そうした表象の形成には個人差があり，それは生徒だけでなく教師についても同じである。賢治の文学的評価が定着しているだけに，教師も生徒も賢治の作品がわからなければいけないと思いすぎない方がよいのかもしれない。

もう一つは，Merckelbach et al.（2001）が空想傾向を調べる尺度の名前を創造的体験質問紙CEQとして，空想という用語を避けていることについてである。空想ということばが回答者によってはネガティブな意味合いを持つかもしれないと考えたからである。空想は現実の束縛を離れて認識をいくらでも拡張する力を持っているが，人は現実世界との相互作用の中で生きているのも事実である。Harari（2018　柴田訳2019）は，「私たち人間は，虚構の物語を創作してそれを信じる能力のおかげで世界を征服した。したがって私たちは，虚構と現実を見分けるのが大の苦手だ。」（p.394）と述べている。我々の認識には虚構が入り，物語にならざるをえない，それが避けられないということであろう。イメージ特性の個人差が大きいことを考えれば，人は虚構と現実の間の位置取りが一人ひとり違うということになるので，物語の作り方も人によって違うことになるだろう。そこからMerckelbach et al.のような懸念も生ずるわけである。

## 引用文献

Belicki, K.（1992）. Nightmare frequency versus

nightmare distress: Relationship to psychopathology and cognitive style. *Journal of Abnormal Psychology*, *101*, 592-597.

Davis, S., Dawson, J. G., & Seay, B. (1978). Prediction of hypnotic susceptibility from imaginative involvement. *American Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, *20*, 194-198.

Gordon, R. (1949). An investigation into some of the factors that favour the formation of stereotyped images. *British Journal of Psychology*, *39*, 156-167.

浜垣誠司（2014a）. 9 月に比叡山でお話ししたこと(1) http://www.ihatov.cc/blog/archives/2014/12/91.htm（2019 年 8 月 18 日）

浜垣誠司（2014b）. 9 月に比叡山でお話ししたこと(2) http://www.ihatov.cc/blog/archives/2014/12/92.htm（2019 年 8 月 18 日）

浜垣誠司（2019）. 宮沢賢治作品の幻想性の由来－その方法論と体験特性－　日本イメージ心理学会第 20 回大会公開シンポジウム資料

Harari, Y. N.（2011）. *Sapiens: A brief history of humankind*. Deborah Harris Agency.（ハラリ, Y. N. 柴田裕之（訳）（2016）. サピエンス全史　河出書房新社）

Harari, Y. N.（2018）. *21 Lessons for the 21st Century*. Spiegel & Grau.（ハラリ，Y. N. 柴田裕之（訳）（2019）. 21 Lessons － 21 世紀の人類のための 21 の思考－　河出書房新社）

畠山孝男（2005）. 超常信念の発達的比較　東北心理学研究，*55*，71.

畠山孝男（2006a）. 想像活動への関与尺度（C-III, III）による超常信念の予測力の発達的比較　東北心理学研究，*56*，45.

畠山孝男（2006b）. 想像活動への関与尺度（C-III, III）による想像反応傾向の発達的比較　日本心理学会大会発表論文集，*70*，62.

畠山孝男（2009）. 心像教示による末皮膚温の制御と心像能力の個人差－非接触式皮膚赤外線体温計を用いて－　東北心理学研究，*59*，9.

畠山孝男（2011）. 心像教示による末梢皮膚温の制御と心像能力の個人差(2)－初期体温を考慮した分析－東北心理学研究，*61*，24.

畠山孝男（2018a）. 児童のイメージテストに対する反応－大学生との平均得点，相関係数の比較－　日本心理学会大会発表論文集，*82*，1AM-070.

畠山孝男（2018b）. イメージ能力の個人差と認知－研究の展望－　イメージ心理学研究，*16*，1-37.

畠山孝男（2019）. 児童のイメージテストに対する反応(2)－大学生との得点分布の比較－　日本イメージ心理学会大会発表論文集，*20*，10-11.

畠山孝男・川俣光司（2005）. 想像反応傾向の発達的比較　日本教育心理学会総会発表論文集，*47*，88.

Hiscock, M.（1978）. Imagery assessment through self-report: What do imagery questionnaires measure? *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *46*, 223-230.

池上雄三（1992）. 宮沢賢治・心象スケッチを読む　雄山閣出版

板谷栄城（1990）. 宮沢賢治の見た心象－田園の風と光の中から－　日本放送出版協会

板谷栄城（1992）. 素顔の宮澤賢治　平凡社

笠井仁・井上忠典（1993）. 想像活動への関与に関する研究：測定尺度の作成と妥当性の検討　催眠学研究，*38*(2)，9-20.

Kawahara, M., & Matsuoka, K.（2013）. Object-spatial imagery types of Japanese college students. *Psychology*, *4*(3), 165-168.

Kihlstrom, J. F., Glisky, M. L., Peterson, M. A., Harvey, E. M., & Rose, P. M.（1991）Vividness and control of mental imagery: A psychometric analysis. *Journal of Mental Imagery*, *15*(3&4), 133-142.

栗原敦（2019）. ファンタジーの効用　日本イメージ心理学会第 20 回大会公開シンポジウム資料

栗谷川虹（2014）. 宮沢賢治の謎をめぐって－「わがうち秘めし異事の数，異空間の断片」－　作品社

Marks, D. F.（1973）. Visual imagery differences in the recall of pictures. *British Journal of Psychology*, *64*, 17-24.

松岡和生（2010）. 空想傾性（Fantasy Proneness）のポジティブ機能　現代のエスプリ，*512*，48-59.

松沢哲郎（2011）. 想像するちから－チンパンジーが教えてくれた人間の心－　岩波書店

Merckelbach, H., Horselenberg, R., & Muris, P.（2001）. The Creative Experiences Questionnaire（CEQ）: A brief self-report measure of fantasy proneness. *Personality and Individual Differences*, *31*, 987-995.

岡田斉（2004）. 空想傾向と幻聴の関連性－ White Christmas test を用いた検討－　東北心理学研究，*54*，13.

岡田斉（2006）. 大学生における空耳体験の頻度についての調査―幻聴，難聴，聞き間違いの関係性―　人間科学研究（文教大学人間科学部），*28*，25-34.

岡田斉・松岡和生・轟知佳（2004）. 質問紙による空想傾向の測定－ Creative Experience Questionnaire 日本語版（CEQ-J）の作成－　人間科学研究（文教大学人間科学部），*26*，153-161.

小山内秀和・岡田斉（2011）. 物語理解に伴う主観的体

験を測定する尺度（LRQ-J）の作成　心理学研究, *82*, 167-174.
大島丈志（2019）. 宮沢賢治の「舞い」と，異空間からの「帰還」－「空想傾向」を背景として－　日本イメージ心理学会第20回大会公開シンポジウム資料
Paivio, A.（1971）. *Imagery and verbal processes*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
Paivio, A., & Harshman, R.（1983）. Factor analysis of a questionnaire on imagery and verbal habits. *Canadian Journal of Psychology*, *37*, 461-483.
Richardson, A.（1969）. *Mental imagery*. London: Routledge and Kegan Paul.（リチャードソン，A. 鬼沢貞・滝浦静雄（訳）（1973）. 心像　紀伊國屋書店）
Richardson, A.（1977）. Verbalizer-visualizer: A cognitive style dimension. *Journal of Mental Imagery*, *1*（1）, 109-126.
Richardson, A.（1994）. *Individual differences in imaging: Their measurement, origins, and consequences*. New York: Baywood.
齊藤智（2013）. 記憶　藤永保（監）最新心理学事典（pp.95-97）平凡社
斎藤稔正（1973）. 変性意識状態質問紙作成の試み（1）催眠学研究，*18*（2），21-26.
Sheehan, P. W.（1967）. A shortened form of Betts Questionnaire upon Mental Imagery. *Journal of Clinical Psychology*, *23*, 386-389.
柴山雅俊（2007）. 解離性障害－「うしろに誰かいる」の精神病理－　筑摩書房
Start, K. B., & Richardson, A.（1964）. Imagery and mental practice. *British Journal of Educational Psychology*, *34*, 280-284.
田辺肇・笠井仁（1993）. 解離性体験と催眠感受性との関連　催眠学研究，*38*（1）, 12-19.
Tellegen, A., & Atkinson,G.（1974）. Openness to absorbing and self-altering experiences ("*absorption*"), a trait related to hypnotic susceptibility. *Journal of Abnormal Psychology*, *83*, 268-277.
鳥山敏子（1985）. イメージをさぐる－からだ・ことば・イメージの授業－　太郎次郎社
鳥山敏子（1996）. 賢治の学校－宇宙のこころを感じて生きる－　サンマーク出版
van de Ven, V., & Merckelbach, H.（2003）. The role of schizotype, mental imagery, and fantasy proneness in hallucinatory reports of undergraduate students. *Personality and Individual Differences*, *35*, 889-896.
Wilson, S. C., & Barber, T. X.（1983）. The fantasy-prone personality: Implications for understanding imagery, hypnosis and parapsychological phenomena. In A. A. Sheikh（Ed.）, *Imagery: Current theory, research, and application*（pp.340-387）. New York: Wiley.
山下聖美（2017）. 宮沢賢治スペシャル　100分de名著　NHK出版
山崎有望・松岡和生（2017）. 空想傾性（Fantasy Proneness）の肯定的機能－フロー体験およびWell-beingとの関連性－　日本イメージ心理学会大会発表論文集，*18*，24-25.